

●外交時評

華国鋒体制の安定性

中嶋嶺雄 (東京外国語大学助教授)



文化大革命以来の十年間、中国の政治にはあまりにも無理が多かった。そしてその無理を強行してきたのがいわゆる文革派のリーダーたちであり、とくに江青夫人の恣意(しい)が政治に投影されてきたことは明白であつただけに、彼女にたいする憎悪や怨恨(えんこん)からしても、毛沢東主席なきあとの文革派上海グループの命運には、多くの不安があつた。



私はこれらの点について、文化大革命が中国社会の内部に根をおろしてはおらず、文革派のかまびすしい政治言論が、単に表層のプロパガンダとしてしか大衆に聴きいれられていないこととともに、これまでも繰り返してきつたつもりである。毛沢東の死にさいしても、「毛沢東体制は解体する」(「朝日ジャーナル」七六年九月二十四日号)、「毛沢東時代への訣別」(「諸君」七六年十一月号)などのテーマで書いてきたゆえんである。

だがそれにしても、事態はあまりにも早く現実と化し、そのありさまはあまりにも酷烈であ

つた。こうして江青夫人ら「四人組」は、毛沢東体制の絶頂からいっきよに失墜し、いまや最大の「妖魔」として八億民衆の公敵となつてしまったのである。

事態がこのようななつてみると、思い起こされるのは去る四月の天安門事件であり、そこにあらわれた江青、姚文元らへの激しい批判の噴出と、「四つの現代化なりし日には、われら祝宴を設けて飲みあかささん」とうたつた「反革命分子」の詩であろう。

(天安門事件について詳しくは「中央公論」七六年九月号所載の拙稿「再構成・天安門事件参照」)

江青夫人ら「四人組」が失墜し、「工業、農業、国防、科学技術の現代化」という「四つの現代化」路線が、私の予想した通りいまや全国的に復活した(十月二十五日付「人民日報」「紅旗」「解放軍報」三紙誌共同社説「偉大な歴史的勝利」)今日、事態の転回がきわめて急速であることが認められると同時に、いまや「反革命分子」が完全に勝利したとみなしてよいのである

う。



このような状況のなかで、「四人組」処断を実行し、みずから党主席兼首相という類例のない地位についた、華国鋒新主席にたいする支持の雪崩現象が起こっている。そして、華国鋒主席は処断者を「四人組」に限定し、これまで彼らに近かつたと思われる人物(たとえば「四人組」の手兵ともみられていた首都工人民兵の責任者、倪志福党中央政治局候補委員)を「四人組」から切り離して味方につけるなど、はやくもその政治的手腕をみせはじめている。こうした事実はいずれも華国鋒主席の政治的地盤の拡大につながるであろう。

しかし、なんといつても、「四人組」という「主要矛盾」の排除にさいしては一致した党の長老幹部、人民解放軍および特務・公安関係者が、今後もひきつづき華国鋒主席を支持しつづけるかどうか最大のカギであろう。

この点では、李先念副首相をはじめ、実力派三軍人の陳錫聯(北京军区司令)、許世友(広州军区司令)、李德生(瀋陽军区司令)ら、いづれも湖南省黄安県出身の「黄安グループ」が、葉劍英副主席兼国防相とともに、周恩来・鄧小平系の実務派グループとして当面は華国鋒主席を支持するであろうし、特務・公安関係は華国鋒主席自身の手中にあるといつてよい。

しかも、党主席はきわめて集権的かつ絶対的

なポストであり、このようにみえてくると、華国鋒主席の基盤は意外に強いのかもしれない。
しかし、「狡兎(こうと) 死して良狗(りょうこ) うく) 煮らる」のことわざを、これまでその通りに繰り返してきた中国である。将来、反文化

大革命がさらにすすみ、非毛沢東化の課題が本格的なものになったとき、華国鋒主席自身が非上海グループの文革派であったという過去や、もしかすると毛沢東の血をついでいるかもしれないという当面のナゾの真偽が、ひよっとする

と彼の致命傷になるかもしれない。
◇——
華国鋒体制の安定性について、それを肯定するには、まだまだ時間を経なければならぬようである。

●十月の論壇から

毛死後の中国をめぐる活発な論議

鈴木幸寿 (東京外国語大学教授)

むずかしい中国情勢の判断

九月九日の毛沢東主席の死は、今年に入ってからに周恩来、朱徳という二人の要人の死に次ぐものであり、まさに中国の屋台骨を大きく揺るがしたといつてよいのであるが、「当然、中国はいずれこへ」をめぐる活発な論議がなされてきたし、これが今後かなり長期にわたって問題になっていくであろうことは予想される。

これは最近の新聞報道で知られているように、華国鋒主席就任をクーデターによって阻もうとした江青女史、王洪文、張春橋、姚文元らの策動が暴露され、毛主席の死後いくらかたぬうちに展開された権力闘争のはげしさが、われわれの予想をはるかに超えるものであるという事実によって、ますます中国情勢の判断の困難さを示すこと

と軌を一にしている。

毛死去がもたらした波紋のひろがりと言論界にも数多くの影響を与え、総合誌はこぞって論稿をさまざまな角度からとりあげている(ただし『世界』はただ大江健三郎の「眼量を放げられよ—毛沢東の死によせて—」と岡田春夫社会党議員の「毛沢東主席の思い出」談話筆記の補筆の二つしか掲載していない。ロッキード事件のときも『世界』はすぐ問題に飛びつこうとしなかった。これは毛沢東が単に偉大な革命政治家であったということだけによるものではなく、哲学者あるいは文学者(詩人)といった側面も合わせたいためで、『展望』の竹内実、野村浩一の対談「毛沢東思想の遺産」、また同誌、富士正晴、司馬遼太郎の対談「毛沢東のいる風景」などはこのことを物語っている。

しかし何といつても、毛沢東の死が複雑な国際政治、ひいては国際経済などに与える影響のほうが強いだけに、これらをめぐる論議に焦点が集まっていたことは否定できない。しかも、このことは中国の国内情勢の変化によって決定されるだけに、予測や予断推測が入り乱れてくる可能性をもっている。したがって、毛沢東個人の礼賛者もふくめて、ただ「巨星おつ」といった立場の論評だけでは、ことすまないのである。

的確、中嶋論文の指摘

こうしたなかで、毛死後約一カ月半にして起こった権力闘争の発生をある程度まで予測、予言して、びたりの射た論文として『諸君』の「毛沢東時代への訣別」(中嶋嶺雄)のもつ意義は大きい。